

---

# 出発進行！！ P発アイドル行

山口多聞P

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

出発進行！！ P発アイドル行

### 【Nコード】

N4731R

### 【作者名】

山口多聞P

### 【あらすじ】

765プロのPと社長、そして2人のアイドルによる秘密の計画が進行しつつあった。それに気づいた他のアイドルたちは、彼らを追う。すると・・・

pixivにも転載しております。

## 1章（前書き）

短編の予定でしたが、連載に変更しました。予定では4話構成です。どんなに延ばしても8話以内に収めたいと思います。

なお、タイトルに深い意味はありません。

## 1章

ある日の765プロ

「Pさん、こちらの書類の確認をお願いします。」  
プロデューサー

事務員の音無小鳥に声を掛けられ、それまで自分のデスクで仕事をしていたPは振り返る。

「ああ、小鳥さん。ありがとうございます。確か、来月の皆のスケジュール表でしたよね？」

「はい。言われたとおりに作りましたよ。確認をお願いしますね。」

小鳥からスケジュール表を受け取ると、Pはそれに目を通し、ミスが無いか確認します。

「これで良いです。印刷お願いします。」

「わかりました。刷っておきますね・・・あら？Pさん、そのカレンダーのマークは何ですか？」

小鳥はPのデスク上のカレンダーに興味を引かれた。そのカレンダーには、1ヶ所デカデカと丸印が描かれていた。

「え！？ああ、これは今度ちょっと大事な用がありました。」

「大事な用？そう言えばその日は有給を申請していましたよね・・・あ！？まさか誰かとデートするとか!？」

小鳥がジト目でPの顔を見る。そして彼女の言葉に、P以上に素早く反応した人間がいた。

「え!？」

「な!？」

「うそ!？」

「Pさん、それ本当ですか？」

彼を慕う765プロのアイドルたちだ。ちなみに今反応したのは、順番に如月千早、水瀬伊織、我那覇響、天海春香である。

「何勝手に決め付けているんですか!そんなんじゃないですよ。ちよつと出かけてくるだけです。」

「出かけるって?」

「日帰り旅行、みたいなものでしょうか。」

「P、1人だけ出かけるなんてずるいぞ!」

「そうよ!その日は私達、レッスンが入っているのよ!なのに、あんたがいないんじゃないじゃない!」

「そうですよ、P!」

「酷いです!私を誘ってくれないなんて!」

と、響・伊織・千早・春香が抗議の声を上げる。

「本当にごめん。けど、ちゃんと当日のメニューは律子と小鳥さんに言っておくから。それに、この有給は社長からちゃんと許可を得ているんだから、文句は受け付けない！いいな・・・と、外回りの時間だ。じゃあ、そう言うわけで俺は出かけてくるから。」

そう言うと、Pは逃げるように事務所から出て行ってしまった。

「全く、あいつは何を考えているのよ！このスーパーアイドル伊織ちゃんをほったらかしにして、自分だけ有給とって旅行へ行くなんて！」

「ええ。けど、有給はPの権利だし。それに、P最近忙しかったから、日帰り旅行くらいは大目に見てあげましようよ。」

憤る伊織に対して、千早が冷静な意見を出す。その言葉に、他の3人も落ち着く。Pが労基法を全く無視した過重労働をしているのは、周知の事実だったからだ。

「でも、Pさんどこへ行くんだろう？」

「多分、自分の故郷沖縄さ！」

「響、確かに沖縄がいい所なのは認めるけど、日帰り旅行よ。さすがに遠すぎるわ。」

響の言葉に、伊織が冷や水を浴びせる。

「だよな。」

「せいぜい、千葉か山梨、群馬あたりで温泉でも楽しんでくるのが精一杯だと思うけど。」

千早の言葉に、春香がポツと頬を赤くする。

「温泉か・・・Pさんと一緒に温泉行きたかったな。」

そんなアイドルたちを見て、小鳥がイジワルそうな表情を浮かべる。

「甘いわね皆。」

「え！？何がですか、小鳥さん。」

「あのPさんが日帰りで温泉旅行なんて、人並みな所に行くかしら？」

「そりゃあ、まあ小鳥の言うことにも説得力があるけど。」

伊織の言葉に、小鳥の表情がさらに緩む。

「Pさんは毎日、アイドルたちに囲まれて生活しているのよ。けど、Pがアイドルに手を出すなんて御法度。欲求が相当溜まっているんじゃないかしら？」

「あの、小鳥さん。それってどう言うことですか？」

「春香ちゃん、Pさんだって男なのよ。だから、時々そう言ういか

がわしいお店に行く事だつて・・・」

「・・・な、何だつて!?!」

「あ、けどPさんはこれだけのアイドルに囲まれて何もしいくらだから、もしかしてそつちのケもあるかも。」

ガクガク（アイドルたちが震える音）

「Pさんが、行くのはもし「一体何を言っているのかな?音無君?」  
楽しそうに話している小鳥の背後に、文字通りの黒い影が現われる。」

「ピヨ!?しゃ、社長!」

765プロ社長の高木であつた。

「全く、何をやっているのかと思えば、仕事をサボつてアイドルたちに余計なことを吹き込んでいたようだね。」

「そ、そんな吹き込むなんて滅相もない。それに、サボっていたわけじゃなくて、皆と楽しく会話して、皆のモチベーションを上げよう・・・」

「ふむ、私が見たところ、皆フリーズしてモチベーションを上げるどころか、下げているようにしか見えないんだが?」

「ええと・・・」

「音無君。営業妨害と職務怠慢で、給料5%カットね。」

「ピヨオオ!!!???そ、それだけは勘弁して下さい!今お給料削られたら、冬コミの軍資金が!?!」

必死に懇願する小鳥。しかし、高木社長はそれを華麗にスルーすると、アイドルたちと向き合う。

「君たち!一体いつまでそうしているのかね!?!」

「「「「!?!?!」」」」

「全く、君たちはほぼ毎日P君と一緒にいるんだから、少しくらい彼のことを信じてあげたらどうなんだい?」

「「「「ごめんなさい。」」」」

「いいかね、P君は小鳥君が言ったような下衆な男でもなければ、そっちのケがあるわけでもない。それは断言しておこう!今度の有給だって、長野へ行くと聞いている。変な勘繰りをするものではないぞ。」

「「「「・・・」」」」

「わかったかな?」

「「「「はい。」」」」

「わかればよろしい。それじゃあ皆、引き続き仕事に励んでくれたまえ。」

結局、この話は社長の登場によって、これで終わりとなった。減給処分を言い渡され、涙目な小鳥を残して。

「うー、買える同人誌が減っちゃうよー。」

涙を流す小鳥。高木はそんな彼女にあきれ返りながら、言葉を掛ける

「小鳥君、これ以上給料を減らされなくなったら、さっさと自分の仕事に戻りたまえ。」

「はい。」

「ああ、あと私はこれから少しかり用事があるので出かけてくる。P君も外回りでいないし、すぐに律子君が戻ってくるだろうが、ちゃんと仕事はするように。」

高木社長は事務所にいるメンバーに念を押して、事務所から出て行った。

数時間後

「と言うわけで、危うく君にホモ疑惑が出る所だったよ。」

喫茶店の席で、高木はPと話し合っていた。

「全く、あの人は懲りないな。」

「まあ、そこが彼女のアイデンティティーだからな。それに何を今更だ。」

「ですね。」

「で、P君。君の方はどうだった？」

「ダメでした。外れました。」

「ふむ。私も外れだった。そうになると、残るは秋月君と萩原君の2人か。」

「ええ。1枚で2人ですから、2人とも当たっていると良いんですが。」

「こればかりは運だからな。最悪全員外れも覚悟しなければならない。」

真剣な表情で話し合う2人の元に、若者が2人やってきた。

「社長さん、Pさん、遅くなりました。」

「ごめんなさいですう。」

やってきたのは、女顔の少年と美少女・・・アイドルの秋月涼と萩原雪歩だ。

「いやいや、私たちもついさっき着いた所だ。」

「こつちが遅刻したんじゃないかと、最初は思ったんだが、2人が遅れるなんて珍しいな。それに、2人とも走って来たみたいだな。」

「ごめんなさいPさん。愛ちゃんと絵理ちゃんがしつこくて。」

「ごめんなさいですうPさん、乗ったバスが途中で故障して止まって。こんなついていないダメダメな私、穴掘って埋まってますう！」

と黄金のスコップを振り上げる雪歩。もちろん周りの客はドン引きだ。そして素早く、慣れた手つきで涼とPが止める。

「雪歩さん、堪えてください。」

「こんな所に穴掘ったら迷惑だから。あと全国穴掘り選手権優勝のお前がやったら、本当にシャレにならないから。」

「じ、ごめんなさいですう。」

「落ち着いたなら、君たちも座って何か注文したまえ。」

「はい(ですう)」

高木に促され、座る2人。

それから雪歩に引きまわっているウェイトレスに2人の分を注文をして、4人は話始める。

「さて、今日皆に集まってもらったのは他でもない。例の件の抽選が当たったかについてだ。私とP君は、残念ながら外れたった。残る

は君たち2人だが、どうかな？」

すると、雪歩が泣きそうな表情で答える。

「ごめんなさいですう。私も外れました。こんなくじ運もなくでダメな私、一生穴掘って埋まってますう！！」

「はいはい。外れたのは残念だがいい加減それはやめろ。」

再び、Pが慣れた手つきで雪歩を止める。

「ふむ。萩原君もダメだったか。となると、残りは秋月君だが。君の方はどうだったのかね？」

「はい・・・当りました！」

「え！？それは良かった！」

「おお、当たったか！さすが秋月一族の最高傑作！」

喜ぶ2人に対して、涼は冷静に言う。

「けどPさん、1枚だけじゃ。」

「そうだな。この中の2人は炙れることとなるが。」

「あ、だったら僕は良いです。」

涼が辞退を申し出る。

「おいおい。譲ってくれるその気持ちは嬉しいが、当ったのは君の出した葉書じゃないか。アイドルたるもの、もう少し貪欲であるべきだと思っぞ。」

「そうだぞ涼、社長の言うとおりだ。謙虚なのも悪くないが、折角一生に一度のチャンスなんだから。」

「けど、お2人も楽しみにしていましたし。」

「そうですね。私もいいですから、お2人で楽しんできてください。」

「・・・どうするP君？」

「・・・いや、俺はやっぱいい。」

「ふむ。では、私も辞退しよう。」

「ええ！？いいんですか？」

「秋月君。確かに最後の機会を逃してしまうのは残念だが、私は君たちの倍以上の人生で充分乗り倒したと言っている。むしろ、君たちの様な若い者に感動の機会を与えておきたい。その方がいいだろう。」

「俺も同感です。そう言うわけで、涼と雪歩で楽しんで来い。」

「そんなの悪いですう。私はお2人程好きと言っわけじゃないのに。」

「だからこそだよ萩原君。だからこそ、2人にあれの魅力を知ってもらいたいんだ。」

「そうだ雪歩、社長の言うとおりだ。お前たちが楽しんでくれるのなら、俺たちも本望だ。だから、遠慮するなって。」

「どうします？雪歩さん。」

「ここで断ったらPさんと社長さんに悪いもんね・・・わかりました。好意に甘えます。」

「決まりだな。では、当日のスケジュールを決めようじゃないか。」

「はい！！」「」

高木社長の言葉を受けて、3人はノリノリで何かの計画を練り始めた。

## 1章（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 2章

「ねえねえ、律ちゃん。」

「ちよつと休もうよ↓」

「この近くに、美味しいドーナッツの店があるんだって↓」

「折角だから食べていこうよ↓」

「ダメよ亜美、真美。このまま真つ直ぐ事務所に帰るって、もう連絡したんだから。寄り道せずに帰るわよ。」

秋月律子は自由奔放な双子のアイドル、双海真美と亜美の姉妹に呆れながら言う。

今彼女たちは、レッスン帰り。あと少しで765プロの事務所なのだが、双子がダダをこねて律子の手を煩わせていた。もつとも、律子にとってはもう慣れたことであつたが。

「それに、事務所に帰ればお茶とお菓子くらいあるんだから。無駄遣いするもんじゃないわよ。」

「「はい。」」

「真美真美、律ちゃんは相変わらず固いね。」

「全くだよ。もう少し気を効かしてくれても良いのにね。」

亜美と真美が愚痴を言い合うが、当然それは律子の耳に入ってくる。

「ハイハイ、聞こえてるわよ。静かにしないと、帰った後のお茶もお菓子も無しにするわよ。」

「そりゃないよ↓」

「全く・・・あら？」

律子が急に立ち止まった。

「どうしたの？」

「あれ。あそこ。」

「え？」

律子が言う方を2人を見ると、そこには楽しげに話しながら歩く3人にとって見覚えの大いにある青年と少年と少女が1人ずつ見えた。

「あ↓！兄ちゃんと雪歩じゃん！」

「もう1人は、確か女装してアイドルやってた、律ちゃんの従姉弟の・・・」

「そう、涼よ。なんであの3人が一緒に歩いているのかしら？」

すると、亜美と真美がニヤリとする。

「……は。」

「亜美と真美に。」

「「任しておきな!!」」

ピューン!!

「え?あ!?!こら!!て、行っちゃった。全く。」

亜美と真美は、疾風のごとく消え去っていた。

5分後。

「てーへんだ!てーへんだ!」

「三角形のてーへんだ!!」

2人は大騒ぎしながら帰ってきた。周囲の歩行者からの視線も省みずに。

「こら!街中なんだから静かにしなさい!」

「それどころじゃないよ、律ちゃん!」

「今3人の話を盗み聞きしてきたんだけど!」

「聞き捨てならないセリフを聞いた気がしたけど、まあいいわ。それで、3人はそんなに驚くようなことを話していたの?」

「そうそう。」

「もう本当にビックリだよ！」

「一体何を言っていたのよ？」

「それが、今度あの3人、一緒にどこか出かけるみたいなんだ！」

「え！？それ本当？聞き間違えなんかじゃないの？」

「聞き間違えじゃないよ！」

「どこへ行くかはわからなかったけど、一緒に行くとか、楽しんでくるとか言ってたし！」

「3人とも楽しそうに話してたし！」

真美と亜美の真剣な言葉に、律子も信じざるを得ない。少なくとも、Pと涼と雪歩が何らかの理由で共に行動しているのは事実のようだった。

「・・・亜美、真美。」

「「？」「」

「事務所に急ぐわよ。」

「「あらほらサッサー！」「」

10分後765プロ事務所

「ただいま！」

「「帰ったよ↓!!」」

「あ、お帰りなさい律子さん。それに真美ちゃん亜美ちゃん。で、どうしたの？息を切らして。」

小鳥が3人を出迎える。そんな彼女の挨拶を半ば無視して、律子は彼女に問う。

「小鳥さん、Pと雪歩は!？」

「え？2人ともさつき事務所に戻ってきて、すぐに帰ったけど。もう終業時間だったし。」

「一足違いだったか。」

律子は少しばかり悔しそうな表情をする。

「どうしたの？何か急な用でもあったの？」

「はい。じつはさつき、街中でPと雪歩、それに涼と一緒に歩いているのを見たんです。」

「ええ!？Pさんと雪歩ちゃんが一緒に歩いているのはともかくとして、何で涼君まで？」

さらに亜美と真美が会話に割り込む。

「しかもそれだけじゃないんだよ!」

「何と、その3人は何か怪しげな計画を立てているのだよ、ピヨちゃん。」

「怪しい計画?」

「この娘たちが言うには、Pたちは3人でどこかへ出かける計画を練っているみたいなんですよ。」

「ええ!? あ! まさかPさん!」

「まさかって、何か思い当たる節があるんですか?」

「ええとねえ、実はね。」

小鳥は昼間のこと(第一章参照)を話した。

「成る程、つまりそのPが言っている日帰り旅行と、亜美たちが聞いた話が繋がっていると?」

「そう言うこと・・・は!? まさか3人で一緒にどこか如何わしいお店に。」

小鳥が妄想を口にする。

「律ちゃん律ちゃん。」

「如何わしいお店で、何？」

「あんたたちは、知らなくていい事よ。それから小鳥さん、そう言うことを口に出すのはやめてください。社長に言いつけますよ。」

「やーめーてー！これ以上給料減らされちゃ適わないわ！わかった！わかったからー！！」

小鳥が泣きながら懇願する。

「全く。けど、一体Pたちは何を企んでいるのかしら？」

「気になるね↓」

「気になるぜ↓」

「明日2人に問い詰めてみましょう。」

「それが手っ取り早いですね。私は涼の方にも訪ねてみます。」

Pたちが練っていた秘密の計画に、765プロの他のメンバーが気づき始めていた。

2時間後 秋月涼宅

「いい日旅立ち」の着信音

「あれ、電話だ？誰だろう・・・ゲ！？律子姉ちゃん！・・・もしもし？」

「もしもし。あ、涼？」

「律子姉ちゃん。何？」

「ちょっとあんたに聞きたいことがあってね。あんた、今日の夕方家のPと雪歩と一緒に歩いていたらわよね？」

まさかの言葉に、涼の声が明らかにおかしくなる。

「え！？あ、そうだけど。何で？」

「どうしてかなあ、と思って。」

（やっぱり何か隠しているわね。）

「別に、街で偶然会ったから、一緒に話していただけで。」

（そう来るか・・・じゃあ、ちょっと揺さぶり掛けてみるか。）

「ふーん。そうなの、偶然なの・・・別に3人で何か企んでいるとかそう言うわけじゃないんだ。」

（ギク！何で律子姉ちゃんがその事を・・・マズイ！このままじゃバレちゃう。雪歩さんやPさんは、事務所の皆に知られたくないって、言ってたし！何とかしないと！）

「そんなわけないじゃん！」

（語るに落ちたわね。それじゃあ、あるって言ってるようなものよ。）

「ふーん・・・涼、正直に言いなさい！あんたたち、何か隠しているでしょ！」

（ギャオオン！やっぱり感づかれてる。）

「涼、言いなさい。いや、言え！」

「言えないよ！」

「そう。私に逆らうのね。だったら、あんたの恥ずかしい過去の数々を、皆にバラしてあげるわ。」

（うわああ！どうしよう。けど、Pさんや雪歩さんとの約束を反故にするわけにはいかないし・・・そうだぞ涼！約束の一つ守れなくて、何がイケメンだ！こうなったら自棄だ。）

「何と言われようと、律子姉ちゃんに言うことは何も無い！」

「な！？涼、あんた私に逆らう気！？どうなっても良いって言うの！？」

まさかの涼の発言に、うろたえる律子。そんな彼女に、涼は一気に畳み掛ける。

「僕1人の犠牲で雪歩さんたちを守るなら、本望だよ。とにかく、これ以上は何も言わないから。」

（りよ、涼がこれまでになくイケメンだわ！一体何が涼をこんなに男らしくさせているの？・・・けど、一度決めたら涼はとことん曲げないタイプだから、ここは引き下がった方がいいわね。）

「今日はこれ位で多めに見てあげるけど、次会った時は覚悟しておきなさい！」

ツーツー・・・

「よ、よかった・・・けど、絶対に律子姉ちゃんのことだから、雪歩さんやPさんを追求するだろうな・・・ここは早く伝えないと！」

涼は携帯電話のボタンを押した。

翌日765プロ

「おはようございます。」

Pが何時も通りの時間に出勤してきた。

「おはようございます。P。」

「よう律子。今日はちょっと早くないか？」

「ええ。実はPに聞きたいことがあった「諸君おはよう！」

Pに続いて高木社長がやってきた。

「あ、社長おはようございます。」

「うむ。P君に律子君もおはよう。早速だがP君、ちょっと社長室に来たまえ。」

「あーはい！」

（聞きそびれたか・・・まあいいわ。機会は幾らでもあるんだし。）

「律子君に感づかれたそうだね。」

「はい。3人で歩いている所を見られたようで。」

「ふむ。別に我々の趣味についてバレるのは問題ないのだが。」

「雪歩の場合、ちょっとマズイですからね。」

弱気な雪歩のことだから、律子に迫られたら喋ってしまう。2人にも容易に想像がつくことだった。

「彼女自身、あまり知られたくないみたいだな。それに今度のことも、恥ずかしいから他の人には知られたくないと言っていたし。」

「どうします？律子に追及されたら、きっと雪歩追い詰められますよ。」

「ふむ・・・よし、P君。私もフォローするから、何とか誤魔化し続けるんだ。幸い、私が一緒にいた所は見られておらんようだね。」

「了解です。」

「おはようございます」

社長とPが話をしている間に、雪歩が出勤してきた。空かさず、彼女の前に律子が立ちふさがる。

（フッフ・・・鴨が葱背負ってやって来たわ。）

「おはよう雪歩。」

「お、おはようございますう。律子さん。」

「雪歩、ちよつとき「諸君傾注！」」

（え！？）

律子の話を遮るように、高木社長の声が事務所内に響き渡った。

「これより朝礼を始める！」

「ええ！？最近ほとんどやっていなかったじゃないですかー！」

小鳥が驚きの声を上げる。

「その通りだよ小鳥君。最近皆も忙しそうだから朝礼は省いていたが、昨日のこともあるからね。ここは一度皆の士気を引き締めるべく、今週一杯は朝礼をやろうと思ってね。と言うわけで、早速始めるぞ！」

（また邪魔された！？けどいいわ。まだまだ機会はたくさんあるんだから！）

しかしながら、この後律子、小鳥、亜美・真美による雪歩とPに対する追求は、尽く社長の横槍によって失敗することとなる。

一方同じ頃876プロでは

「あれ、涼さん。そのカレンダーの印は何ですか？」

涼と同期生の愛が、机の上に置かれたカレンダーの印に気づいた。Pとそっくりである。

「その日は確か、涼さんお休み？」

同じく同期生の絵理も聞いてきた。

「ああ、その日は大切な用事があつて。」

上手く言い訳をする涼。Pとそっくりである。

「あ！？もしかして、デートですか？」

「私達以外と？一体誰と？」

ちなみに、愛と絵理は涼に好意を持っている。

「ええ！？」

「ちょっと涼！どう言うことが教えなさいよ！！」

最近になって事務所のメンバーに加わった桜井夢子。彼女も当然ながら涼に好意を持っている。複数の女性に好意を寄せられる。本当にPにそっくりである。

「ぎゃおおん！愛ちゃんも絵理ちゃんも夢子ちゃんも落ち着いて！！」

涼は持ち前の女難の相に悩まされていた。もう本当に、Pにそっくりであった。

## 2章（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

### 3章

前話より1週間後 765プロ会議室

「これは絶対に社長もグルね。」

律子はそう断言した。

「ああ、雪歩やPに話を聞こうとする度に、社長が邪魔してくる。絶対に何かあるな。」

「何やら面妖な気配を、あの3人から感じ取ることが出来ます。」

「一体3人・・・あ、涼君も入れると4人か。4人で何を企んでいるのかしら?」

今ここにいるのは、秋月律子、我那覇響、四条貴音、如月千早の4人である。Pやその他のアイドル、社長たちは外出中や休日であるためいない。そして、小鳥はちょうど今日が休日でいなかった。

ただし、メンバーは変われど、このところ765のアイドルたちの間で話題になるのは、Pたちの不審な動きであった。

もちろん、彼女たちは直接本人から聞き出そうと、手を変え品を変えて試みているのだが、4人（社長も含む）のガードは堅く、失敗に終わっていた。

「と言うか、何でもここまでして隠すんだ?もしかして、よっぽどマズイことでもやっているのか?」

「幾らなんでも、P殿や社長殿に限ってそのようなことはないと思います。」

貴音が響の発言を、否定する。

「でも、そうじゃないとあそこまでして隠す理由が見つからないわ。」

千早も首を傾げるしかなかった。

「少なくとも犯罪の類だとは私も思っていないわ。けど、よっぽど私達には知られたくない何かなのよ。その何かが、皆目見当付かないんだけど。」

律子をはじめとして、アイドル達はP達がそこまでして隠すことが何であるのか、図りかねていた。

「あの、ごめんください！」

入り口の方から、元気の良い少女の声が事務所一杯に響いてきた。

「愛、もう少し音量考えなさいよ。」

と、違う声突っ込んでいる。

765プロのアイドル達が一齐にそちらを見ると、2人の少女が立っていた。そしてその姿は、アイドル達には身近なものであった。

「あら？あなたたち876プロの。」

「はい！日高愛です！」

「愛、だから声が大きいって。失礼しました、お久しぶりです秋月さん。桜井夢子です。」

「876のアイドル達がどうしてこんな所にいるんだ？」

「さあ？」

響の言葉に、貴音も首を傾げる。

「ちょうど良かったです！実は涼さんのことに付いて、秋月律子さんに相談に来たんです。」

「涼についてですって！？それはこっちも気になるわね。それから日高さん、私のことは律子で良いわよ。」

「それなら私のことも愛て呼んで下さい。律子お姉さん。」

「ハイハイ、名乗るのはいいから、話を前に進めるわよ。」

夢子が悦に入っている愛に、またも突っ込む。

「それで、一体涼の何が相談したいのかしら？」

「はい。実は。」

愛と夢子が言うには、涼の机の上のカレンダーに印が付けてあり、追求した所必死になって答えをはぐらかしたこと。さらに、その後

事あるごとに追及してみても答えない。さらに、色々なネタで脅迫しても答えないそうだ。また実力行使を試みようとしても、涼に上手く逃げられ（ついでに愛や夢子たちの足並みが揃わないため）聞き出すのに失敗したそうだ。

「・・・と言うわけで、涼が一体何を隠しているのか、まったくわからなくて。」

「律子お姉さんなら、何か知っているのかと思って、聞きに来ました！！」

「最後の２点はちょっとばかり聞き捨てならないけど、まあ今は置いておきましょう。やっぱり、そっちでも涼は怪しいわけね。」

「そっちでもって、やっぱり何か思い当たる節があるんですね？」

「教えてください！！」

「愛さん、ちゃんと教えるから。そんな身を乗り出さないで。実はね・・・」

律子は２人に、自分が電話したときの涼の対応と、そして先日街中で見た光景、そしてPや雪歩、社長たちの不審な行動について教える。

「それは怪しいですね。」

「怪しさ爆発です！」

「でしょ？けどどうしてPたちがそんな行動を取るのか、皆目見当

が付かなくてこっちでも困っていたのよ。」

「本当に4人とも何を企んでいるのかしら？」

千早の言葉に、全員が考え込む。しかし、1分ほど考えてみても何も思いつかなかった。すると、響がこんなことを言い出した。

「こうなったら、Pや社長がいない内に、2人の机を徹底的に探してみるのはどうだ？」

が、すぐにそれを貴音が否定する。

「響、さすがにそれはやり過ぎです。」

千早も貴音に続く。

「そうよ我那覇さん。しかも、それは立派な犯罪よ。さすがに人としてどうかと思うわ。」

「犯罪はいけません！そんなことするのは人間のクズです！！・・・で、夢子さん。どうかしました？」

「いえ・・・何でも無いわ。」

「？」

実は愛は知らなかったが、夢子はこれまで犯罪に近い（と言うよりモロに犯罪）行為をしていた。ちなみに、そんな彼女を止めたのが、涼である。しかも、彼の口ぞえがあったからこそ、876プロに入籍することが出来た。

だからこそ、夢子は涼に惹かれているのだが。

「そうだな、さすがに犯罪はマズイよな。」

「当たり前です。」

バツの悪そうな顔をして答える響に、貴音は真剣な表情で言った。  
すると、律子が笑みを浮かべる。

「けど、犯罪じゃないなら大丈夫よね？」

その表情と言葉に、765の3人は彼女のスイッチが入ってしまったのがすぐにわかった。

（（（律子が鬼畜モードになっている！！）））

一方それがわからない876の2人はと言うと。

（ちょっと、何かヤバイ空気を感じるんだけど）

（ママが何か企んでいる時みたい）

「Pと涼がカレンダーにマークしたのは明後日。4人が何が何でも話さないのなら、直接4人で何をしているのか、この目で見てやるじゃない。」

「それってつまり。」

「何とも面妖な事態になりましたね。」

「さすがに不味くないかしら？」

「まあ、ばれなければ大丈夫だと思いますよ。」

と、響、貴音、千早、夢子の4人は律子が何をしようとしているのか、ちゃんと察した。しかし。

「あの、一体どう言うことですか!？」

ズゴツ!!

全く察していない答えを、しかも大声で愛が言ったので、4人もズッコケそうになる。

「ええ!?! 私何か不味い事言いましたか!?!」

「愛、本気で分からないの?」

「・・・わかりません。」

愛は半分涙目になりながら答えた。

「愛さん、別に泣くほどのことじゃないから。つまり、涼たちを当日尾行するのよ。」

「ええ!?!」

当日

「じゃあ行ってきますー!!」

「行つてらっしゃい。気をつけるのよ涼。」

「くれぐれも一緒に行く人に迷惑掛けるんじゃないぞ。」

「わかつてるつて。」

早朝、涼は両親の見送りを受けて玄関から出た。遠出なのか、背中にはリュックを背負っている。

「うーん、いい天気。今日はいいことありそう!」

と足取りも軽く、歩いて行つた。自らを見張る3人の人影があるとも知らずに。

「出てきたわね。」

「あの、本当にこんなこととして良いんでしょうか?」

「気にすること無いわ。犯罪じゃないから。」

「そうです!スパイみたいで格好良いじゃないですか?」

「愛さん、静かに。それとその感性はちょっと間違っているから。」

「ええ!?!」

「あの2人とも、涼を追わなくていいんですか？」

「そうだった。行くわよ。」

「はい！」

涼の家の前に潜んでいた律子、夢子、愛の3人は涼の尾行を開始した。これこそが彼女達の最終手段であった。しかも、追っているのは何も涼1人だけではなかった。

ブーブー！！（携帯のバイブ音）

「真美と亜美からね・・・雪歩とP、社長も家を出たそうよ。」

そう、この時雪歩とP、さらには高木社長にも尾行を貼り付けていたのであった。雪歩の方は真美と千早、伊織、絵理の4人組である。Pには亜美と春香、響と貴音が。そして社長には、小鳥、やよい、あずさ、美希、真の5人組であった。

ちなみに、社長だけ5人なのは、どこにジャンプするかわからないあずさ対策である。

「まさかこんな大事になるとは・・・」

さすがの夢子も、765と876のアイドルが事実上総動員になるとは、予想外であった。

「私達は社長から休暇をちゃんともらいましたけど、そっちは大丈夫なんですか？」

と言う夢子の問に対して、律子は目を細めて一言こつ答えた。

「バレなきゃ大丈夫よ。」

どこをどうしたらバレないのか気になるところではあったが、それ以上突っ込むと何かヤバそうだったので、夢子はそれ以上何も言わなかった。

そんな夢子を尻目に、律子は真剣な表情で、愛はノリノリ気分で涼の尾行を続ける。相手を見失わず、かつ気づかれない微妙な距離を置きながら、追いかけていく。

そうしている内に涼は、最寄の地下鉄の駅に到着し、その中へと降りていった。

「追うわよ。」

「はい！」

「律子姉ちゃんだけじゃなくて、どうして愛ちゃんや夢子ちゃんまで。」

涼は困惑していた。家を出てから誰かに追われている気がしていた。そこで、道沿いに立っているミラーで時折後を確認した所、律子と夢子、愛が自分を追いかけているのに気づいた。

「どうしよう。このままじゃ、3人を皆の所へ連れて行っちゃう。」

どこかで撒かないと。」

と考えていたが、そうこうしている内に、駅に着いてしまった。

「どうしよう・・・」

と、涼は腕時計を確かめる。

「まだ余裕はあるね。よし！だったら。」

3人は涼が改札からホームに入ると、自分たちも同じホームへと進んだ。ホーム上は視界が良かったため、3人は大分距離を離して彼の姿を追う。涼はホームの一番前に立っていた。そこで、3人はホームの一番後ろに立った。

「涼のやつ、このまま電車に乗るのかしら？」

「多分ね。」

夢子と律子がそんな事を言っている間に、チャイムが鳴りアナウンスが入る。

「お待たせしました。大手町、浦安方面。東葉線直通、快速東葉勝田台行きが参ります。」

10両編成の電車がホームに入り、止まる。そして扉が開く。乗降客の姿はそれほど多くなく。涼が列車に乗る姿が確認できた。

「乗るわよ。」

「ええ。」

「はい。」

3人も列車に乗る。間もなく、発車チャイムが鳴り。扉が閉まった。そして電車が動き始めた。

「じゃあ、もう少し前の車両へ行きましょう。じゃないと涼がどこにいるのかわからない。」

「そうですね・・・て、え!？」

夢子が何かに驚いたような声を上げた。

「どうしたんですか？」

愛が首を傾げる。

「今ホームを涼が歩いていたような。」

「何ですって!？」

律子は走り出し、先頭車両へ向かった。すると、涼の姿はどこにもなかった。

「やられたわ。」

「ふー、何とか撒けたみたいだね。けど、何であの3人が僕を？」

と首を傾げるが、どうして3人があんなことをしているのか、わからなかった。涼自身は秘密があることを、そこまで深く考えていなかったのだ。

「お待たせしました。2番ホーム、JR線直通普通三鷹行きが参ります。」

「あ、いけない！乗らなきゃ！！」

アナウンスを聞くやいなや、涼は反対側のホームへ急いだ。

### 3章（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 4章（前書き）

今回の話を読むに当たっては、市販の時刻表に付随する東京近郊の鉄道路線図を見ながら読むことをおススメいたします。

またキャラクターの家の所在地は全てオリジナルです。

## 4章

JR三鷹駅3番ホーム

「雪歩さん、おはようございます!」

涼が声を掛けた相手は、一瞬ビクッ!となる。

「ひゃ!?!・・あ、涼君か。良かった。おはよう。」

涼と雪歩の2人は、三鷹駅の中央快速線ホームで合流した。涼は律子たちを撒くと、地下鉄東西線の直通列車で、中央・総武緩行線に乗って、ここまで出てきたのであった。

「やっぱり雪歩さんも、つけられていたんですか?」

「うん。まさか自宅にまで張り込まれるなんて、考えもしなかった。」

「本当ですよ。律子姉ちゃんたちも何を考えているんだか・・・それで、雪歩さんはどうやって撒いたんですか?」

「ウッフ。私はね。」

雪歩の家は下北沢である。三鷹駅へ出るには、京王井の頭線に乗って吉祥寺まで出て、そこからJR中央線に乗り換えるのが、一番手っ取り早い移動方法であった。

ところが雪歩は涼からのメールをそこで受け取った。そして案の

定、自分も真美と千早、伊織、絵理の4人につけられているのに気づいた。

「このままじゃマズイと思ったの。だから、ちょっと怖かったけど・・・」

雪歩は井の頭線に乗った所までは、予定通りに進んだ。しかし、まず途中の明大前駅で京王線に乗り換えて、新宿へと向かった。

「がんばって電車を乗り換えたの。けど、やっぱりあの人ごみだけは慣れないな。」

「雪歩さんは、人ごみ（と言うよりその中の男性）が苦手ですからね。」

「うん。それで、何とか撒けなかなと思ったんだけど、千早ちゃんと絵里ちゃんはそので何とか撒いたんだけど、真ちゃんと真美ちゃんがまだいて。」

「それで、どうしたんですか？」

「何とか新宿駅で撒いたわ。」

「あはは。あそこは人も多いし、広いですからね。」

「うん。別のホームに行ったり、人の多い通路を通ったりして。本当に怖かった・・・とにかく遅れなくて良かった。」

雪歩は無事にここまで来れたことに、心底ホッとしているようだった。

「あとは、Pさんと高木さんだけど。2人もつけられているみたいだったからな。大丈夫かな？」

A M B I T I O U S   J A P A N ! の着信音。

「あ、Eメール・・・Pさんからだ。」

涼は着信したメールを確認する。

「俺と社長はちょっと梃子摺っているから、先に立川か八王子辺りで待っていてくれ。」

「だそうですよ、雪歩さん。」

「そう・・・どうしようか？」

「そうですね、まだ予定の時間まで2時間近くありますし。」

2人が悩んでいると、ホームにアナウンスが響く。

「間もなく、4番線に青梅特快青梅行きが参ります。危ないですから、黄色い線までお下がり下さい。」

「取り合えず、乗っちゃいますか。電車に乗ってから、どこへ行くか考えましょう。」

「そうだね。」

2人は入線してきた電車に乗り込んだ。

同時刻 京王線準特急八王子行き車内のP

「さて、どうしたもんかな。」

Pは連結部の扉越しに見える亜美と春香、響と貴音の4人をチラツと見る。4人とも一般人対策か、伊達眼鏡を掛けたり、帽子を被ったり、服装を何時ものイメージと掛け離れている物を着ているが、Pには逆にそれが目立ってしまい、一発でわかる。

「あいつらしつこいぞ。」

まさかここまでしつこい等とは予想していなかっただけに、Pは多少げんなりしていた。

ブー！！ブー！！（携帯のバイブ。）

「お！メールだ・・・涼君からか。」

「Pさんへ。僕と雪歩さんは三鷹で合流して、今青梅行きの特快に乗りました。2人で相談して、このまま拝島まで行って、そこから八高線で八王子へ向かうことにします。なので、八王子で合流しましょう・・・PSこっちは撒きました。なので安心して下さいね。」

「あの2人はそうするか・・・だったら、俺も何とかしてあの4人を撒くか。」

Pは携帯を操って、涼に「了解」と返信を送る。

「Pの奴、誰かと連絡を取っているみたいだぞ。」

「多分雪歩と涼君じゃないかな？さつき2人を追っていた律子や真美たちから、撒かれたって連絡があったし。」

「そうになると、何としてでもP殿を見失わないようにしなければ。」

「任しておきな。この双海亜美、狙った獲物は絶対に逃がさないぜ↓」

Pを追っている4人は、扉越しに見えるPを得物を狙う、メスライオンのごとく監視していた。

ちなみにPの家は都営新宿線沿いの岩本町駅が最寄り駅で、Pはそこから京王線直通の急行に乗り、途中の明大前で準特急に乗り換えていた。

なおPは1人だけであつたので、席に座っているが、4人は席がなかったので立っている。

準特急は次々と駅を通過（準特急の停車駅は明大前、調布、府中、聖蹟桜ヶ丘、分倍河原、高幡不動、北野のみ）していく。

そして列車が減速を始めると、アナウンスが入る。

「間もなく、調布。調布です。京王多摩センター、橋本方面、相模原線はお乗換えです。今度の相模原線は、向かい側1番線から直の

発車となります急行橋本行きです。」

駅に近づいたためか、乗客が席から立ち上がり、扉の方へと移動する。そのため、座席に空きが出る。

「お！？駅に付くぞ。」

「あ、席が空きましたよ。」

「じゃあ私達も座ろうか。」

「座ろうぜ↓」

4人は空いた座席へと座る。その様子を、隣の車両から見ていたPはしめたと思った。

（いいぞ。後は、あいつらが追ってこられないタイミングを見計らつて。）

列車が駅に着き、扉が開く。それと同時にドット乗客が降りていき、それが終わると逆に乗客が乗ってくる。しかし、降りる客よりも少ない。

「間もなく、2番線から準特急八王子行きが発車します！閉まるドアに御注意下さい！次は府中に止まります！」

発車アナウンスが流れ、チャイムが鳴る。

（今だ！）

扉が閉まる直前、Pは列車から走り降りた。そしてそのまま向かい側の急行に乗り込んでしまった。

「『『『あ!?!』『』『』」

プシュー！ガタン！

扉が閉まり、2本の列車は同時に走り始めた。4人が急行の方を見ると、Pが扉からこちらを見て手を振っているのが見えた。

「し、しまった!」

「ど、どうしよう!?!」

「とにかく、次の駅で引き返しましょう!」

「けど貴音ちゃん、この列車特急だから府中まで止まらない。」

「兄ちゃんに一杯食わされた!」

一方別方向に走り去っていく準特急と、一本取られて呆然としているアイドル達を見送ったPはと言えば。

「やっと撒けたな。あとは、この列車で橋本まで行って、そこで横浜線に乗り換えて八王子へ行くだけだな。あいづらきつと、府中から引き返すだろうけど、そうなれば絶対に追いつかれない。これでやっと、気ままにいけるな・・・おつと、この路線は京王多摩センターで小田急と並走するんだった。カメラの用意をしないと。」

Pはこの先の車窓のことを思い出し、かばんの中からカメラを取

り出そうとしていた。

ブー！ブー！

「お！着信だ・・・社長からだ。」

Pは携帯を取り出すと、画面を見る。

「こっちも撒いたよ。豊田駅で会おう！」

すぐにPは携帯を操作して返信する。

「わかりました。」

少し前 最寄り駅へ向かう高木社長

高木社長も涼からの連絡で、尾行がついていることに早々と気づくことが出来た。

（ふむ、追いかけてくるのは小鳥君、高槻君、三浦君、星井君、菊池君の5人か。人数が多いな。さてさて、彼らをどう振り切ったものか・・・）

もつとも、この危惧は間もなくあずさがどこかへとジャンプしてしまい、その搜索のために真が脱落。さらにやる気のない、ゆとりの美希も脱落し、最終的に最寄り駅の鷺ノ宮に着いた時には、小鳥とやよいの2人だけになっていたので、ほとんど気にしなくて良い物になってしまっていた。

（ふむ。残っているのは小鳥君と高槻君の2人だけか・・・このまま拝島急行に乗りうつと思ったが・・・よし。やよい君ならこれで付いて来られまい。）

高木はここで一計を打った。まず目指すべき方向とは逆向きの電車に乗り、新宿まで移動した。そしてそこからJRの駅（西武新宿駅はJRから離れている）へと移動した。もちろん、小鳥とやよいも電車を降りて彼を追う。

「社長、新宿からどこへ行くのかしら？」

広いJR新宿駅構内、多くの人ごみに紛れる物の、社長の黒い影は見落とすうにも見落とせない。2人はしっかりと距離を保って追いかけて行く。

ただし、新宿駅はターミナル駅である。山梨方面へ向かう中央線。都内を環状運転する山手線。遠く静岡や群馬方面へ走る湘南新宿ライン。千葉へと向かう中央・総武緩行線。さらにお台場や埼玉へ向かう埼京線など、様々な路線が乗り入れており、どこへ向かうか検討するのは難しい。

「さあ？あ、社長さんがホームに上がります。」

やよいが見つめる先で、高木社長はホームへと上がるエスカレーターへと向かって行った。

「追いかけるわよ！」

「はい！」

と、2人は社長の後を追ってホームへと上がる。ところが。

「え！？特急列車？」

そこに止まっていたのは、甲府行きの特急列車「かいじ」であった。

「嘘！？まさか本当に長野へ行くの！？あ、けどこの列車は甲府行きて言ってるし・・・取り合えず甲府までの切符と特急券を買わなきゃ。」

「あ、あの小鳥さん。」

「何かしら？やよいちゃん。」

「あの、私そんなにお金がないんですけど。」

「え？・・・ええ！？あと幾らあるの？」

「あ、あと300円です。」

「何でそれだけしかないの？それじゃあ、家へ帰る分もないじゃない！？」

あまりに少ない額に、小鳥が声を上げる。

「ごめんなさい！わ、私あんまりお金を持ち歩かないから。」

「や、やよいちゃん・・・どんなに売れてもあなたはあなたなのね。」

けど、どうしよう。私ももう1人分出す余裕なんかないし・・・どうしよう?。」

「どうしよう?。」

「・・・やよいちゃんを一人置いて行くわけにもいかないし・・・」

小鳥は途方に暮れてしまった。

1時間後 八王子駅3番ホーム

「と言う具合に、結局2人とも特急列車に乗れずに、私の追跡を諦めたわけだ。」

「まさか小鳥さんも、社長が八王子までしか特急に乗らないとは考えなかったんでしょうね。」

「八王子までなら、自由席でワンコイン（500円）で済むから、手軽に使えるんだな。」

社長とPは顔を見合わせて笑った。

「なんか、小鳥さんたちに悪いような。」

「何を言っているんだ雪歩。あいつらが趣味の悪いストーキングするのが悪い。それに、雪歩だってあいつらを撒いたんだろ。でもって、ここに来るまで涼君といちゃいちゃしていたんだろ?。」

「そ、そんな・・・」

Pの言葉に、雪歩が頬を赤らめる。また涼も頬を赤くするが、すぐに話題を変えようとする。

「それで、とにかく皆を撒いて、無事に合流できましたけど、これからどうします?」

「うむ秋月君。多少アクシデントがあつたものの、時間は充分間に合った。我々は予定通り、このまま豊田駅へ向かうぞ。それでいいね?」

「「「はい!!」」」

と、3人が頷いた時である。

「あらあら。何が間に合つて、時間通りなんですか?」

「「「「え!?!」」」」

背後から聞こえてきた声に、4人は恐る恐る振り返った。

#### 4章（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 5章

JR八王子駅3番ホーム お昼前

「き、君は!？」

「あ、あずささん!？」

「な、なんでここに!？」

「多分、何時もみたいに飛んできたんだと思うよ。」

高木社長、P、涼が驚きの声を、雪歩は呆れに近い声を上げた。彼らの後ろに突如として出没した人物、それは765プロの年長アイドル三浦あずさだった。

この人、極度の方向音痴なのだが、恐ろしいのが一度迷子になるとどこに現われるかわからないこと。東京にいたかと思えば、北海道に現われるなどと言うことが、珍しくないのだ。

もつとも、本人はそんなこと全く気にしていない。と言うより自覚していない。

「私もこんな所で、皆さんに会えるとは思いませんでしたわ。小鳥さんたちとはぐれて、自分でも気づかない内にここに。」

「あずささんは、本当に謎な人だな。けど、どうしましょう社長？」

「どうするも、あずさ君を一人置いていったら、今度こそ時空どこ

るか時間の壁さえも破りそうだから、連れて行くしかないよ。」

「うっ、見られなくなかったのに。」

「ところで、皆さんはコソコソと集まって何をしていたんですか？事務所の皆もすごく気になっていましたよ。」

「だからって、尾行していい道理はないよ。来週からはマナー講習会を開いた方が良いかな？」

高木は本気で気にしているようだ。

「ええと、僕たちは今日趣味のために集まったんです。」

「あら？社長さん、Pさん、涼君、それに雪歩ちゃんの4人は同じ趣味を持っていたんですか・・・そもそも、趣味って何ですか？」

「ええ、そもそも言っていないませんでしたから。」

「事務所では控えていたからね。」

「僕も、大っぴらに言ったことありませんし。」

「うっ、言い難いです。」

四者それぞれの反応を見ながら、あずさは首を傾げる。

「そんなに言い難い物なんですか？」

「いや、言い難いというか・・・まあ、雪歩は確実に言い難いだろ

うけど。」

雪歩はそれこそ、この世の終わりという位に浮かない表情をしていた。そんな彼女に、あずさは笑顔で言い寄る。

「大丈夫よ雪歩ちゃん。笑ったりバカにしたりなんかしないから。それに社長さんやPさん、涼君もやってることなんでしょ？ だったら大丈夫よ。」

「は、はいですう。」

「で、結局の所何なんですか？」

「実は我々、鉄ちゃんなんです。」

「鉄ちゃん？」

Pの言葉に、あずさが首を傾げる。

「要するに、鉄道オタクのことです。」

涼がフォローすると、あずさも納得する。

「ああ、最近駅とかでカメラを持って電車の写真を撮ったり、マイクをスピーカーにかざして発車する時の音楽とかを録っている人たちのことですね？」

「間違ってはいませんが、後者はまたマニアックな。」

「録り鉄も最近増えましたからね。」

Pの言葉に、涼が苦笑する。

「それじゃあ、社長さんもPさんも涼君も雪歩ちゃんも電車が大好きな人ってことですか？」

「ふむ、一般人から見ればそうだろうが、厳密にはそうではない。我々4人は確かに鉄道を愛する同志だが、それぞれの好きなテリトリは全く違う。」

「どう言うことでしょうか？」

あずさにはさっぱり分からないようだった。

「うむ。説明すると、私の場合は主に乗り鉄と模型鉄だ。つまり列車に乗るのと、模型を集めるのが好きな人間だ。」

「で、俺の場合は乗り鉄と撮り鉄です。乗りの方は社長と同じですが、撮りの方は写真を取るのが好きと言う意味です。」

「なるほど。じゃあ、涼君と雪歩ちゃんは何が好きなのかしら？」

「僕は、乗り鉄と音楽鉄です。鉄道に関する歌や音楽を聴いたりするのが大好きなんです。この八王子駅は、発車チャイムが夕焼け小焼けで独特なんですよ！しかもホームごとに音程とかが違っていて「はいはい涼君。自分の話は、後でな。次、雪歩。」

少しばかりテンションが上がり、話が長くなりそうだったので、Pが涼を止める。

「は、はいですう。わ、私は・・・あんまりＪＲとかの電車には興味がないんですう。」

「あら？それじゃあ、どうして？」

あずさが、またも首を傾げる。

「雪歩は、地下鉄とかトンネルとかの鉄道施設が好きだからな。」

「そうなんですう！特にこの中央線はこの先トンネルが多くて、スイッチバックの跡が沢山残っている素敵な路線なんです！・・・は！？ごめんなさい。女の子で鉄ちゃんて言うだけで変なのに。さらに変な私なんか、穴掘って埋まってますう！！」

折りたたみ式のスコップを取り出した雪歩が、ホームに穴を掘ろうとする。もちろん、周りの駅員や乗客はドン引きだ。それをPと涼が手馴れた手つきで止める。

「だから止めろって！」

「雪歩さん、堪えて下さい。」

「まあまあ。けど、雪歩ちゃんが嫌がっていたのはそう言うことでしたか。お茶と仕事のことは雪歩ちゃん真剣だったけど、それ位に真剣になれることがまだあったのね。」

「うつ・・・」

雪歩が顔を赤くして俯いた。

「鉄道好きの女の子、所謂鉄娘は最近増えてきたとは言え、まだまだ認知度は低いからな。雪歩としては、恥ずかしくてあんまり他人に知られたくなかったわけだ。」

「うふふ。雪歩ちゃんらしいわね。けど大丈夫よ。別に私は気にしないし、事務所の皆だってそんなことで雪歩ちゃんを変な目で見たりしないから。」

「ほ、本当ですか？」

「うん。」

あずさの言葉を聞き、雪歩はホッとしたようだった。

「良かったですう。」

「けど、社長さんやPさんたちは別に言っても良かったのでは？」

「いやあ、どうも若い女の子に鉄道オタクと思われるのは恥ずかしくてね。」

社長が恥ずかしそうに言う。

「俺も。特に最近撮り鉄への目が厳しいからね。」

Pの場合は、若干後ろめたい様な感じであった。

「そうなんですか。で、今日は皆さんどこへ？」

「おお、そうだった。実は今日、201系のさよなら運転が、この

隣の豊田駅から松本駅まで行われるのだよ。」

「201系?」

「201系と言うのはだな・・・」

P、あずさに201系について説明中。なお、201系について知りたい方は、国鉄201系電車で検索して下さい。

「・・・と言う電車のこと、今日の運転を最後に、中央線から完全引退するんです。それで、今日は抽選に当たった人だけが乗れるさよなら運転が行われるんです。」

「そのさよなら運転に応募した所、2人分当選したからね。そこで、秋月君と萩原君が乗るんだよ。」

「あら?それじゃあ社長さんとPさんはどうするんですか?」

「俺と社長は特急列車とかを使って先回りして、写真だけを撮るんです。」

「そう言うことですか。」

「おっと、そうこうしている内に時間が経ってしまったな。そろそろ豊田駅へ移動しないと間に合わなくなってしまう。」

「よし、じゃあ移動するか。」

「はい。」

「あの、私はどうしよう?。」

「あ、あずさんは俺達に付いてきて下さい。」

「まあ、良いんですか?。」

「あずさんを一人きりにして行く訳にも行きませんし。ちょっと付き合わせちゃいますけど、良いですか?。」

「ええ。私は構いません。」

あずさの言葉に、社長は満足そうに頷いた。

「ようし、ではまず、豊田駅へ移動だ。」

「うわああ! 沢山の人ですね。」

豊田駅に着いたあずさは、ホーム上に立っている沢山の人影に圧倒されてしまう。

「最近はお店でデジカメが買える時代ですからね。カメラ小僧が本当に増えて、しかもマナーの悪い連中の多いこと。困るんですよね。ああ言うのと同類と思われるのは。」

Pの視線の先では、カメラを持った様々な世代の人間が走り回っている。それを注意するアナウンスも聞こえてくる。

「まあまあP君。今日くらいそのことは忘れたまえ。せつかくの201系電車の最後の晴れ舞台なんだから。」

「はあ、そうですね。」

そんな会話をしている2人に、涼が話しかける。

「それじゃあ社長さん、Pさん。そろそろ僕たち受付に行きますので。」

「おう！2人とも楽しんでこいよ。くれぐれも、ばれない様にな。」

アイドル2人組が乗っているなどと知られたら、どうなるかわかったものではない。そのため、今日は2人とも眼鏡を掛けて、帽子をするなど軽く変装している。

「はい！行つてきます！！」

「行つてらっしゃい！！」

3人は涼と雪歩が、仲良く手を繋いで跨線橋を渡っていく後姿を見送った。

「あの2人も隅に置けませんよね。」

「うむ。まあ、マスコミにだけは気をつけて欲しい所だが。あの2人だけにして置くと、飲んでいるブラックコーヒーが、何時の間にかコーヒー牛乳になってしまうからな。」

「あらあら。あの2人付き合っているんですか？」

「そうなんですよ。全く、律子たちの目が無い所なら、所構わずいちゃいちゃして困るんですよね。」

「まあ、我々としてはこれ以上どうしようもない。それよりもP君！我々も戦闘準備だ！！」

「ラジャー！！」

2人の表情が、まるでコンサート前のように真剣そのものになる。その気迫に、あずさは若干引いてしまう。

「せ、戦闘準備ですか？」

「そうです。いいシャッターポイントを見つけなければなりませんから！」

「だが、あずさ君を1人にするわけにはいかんからな。と言うわけでP君、私の分までしっかりしたのを頼むよ！」

「わかってますよ。それじゃああずささん、しばらく待っていてくださいね。」

「は、はあ。」

そしてPは猛然と階段を駆け上り、行ってしまった。

見たこともないPの光景に、あずさは啞然としてしまった。

「ハハハ、あずさ君もさすがに驚きだろう。」

「はい。あんなPさん初めてです。」

「彼は写真を撮るとなると、熱くなるからな。まあ、マナーはしっかり守っているから心配することはない。」

「そうなんですか。」

「まあ、時々マナー違反の奴を見て暴走して、簀〇きにしたり、花壇に〇〇したりするのは行き過ぎだな。」

「あの、社長さん。今何か言いましたか？」

「いいや、何も言っていないよ。ハハハ・・・」

社長は明らかに、不自然な笑い声を上げた。

そんな中で、駅構内に新たなアナウンスが流れた。

「間もなく、4番線に団体列車が参ります。白線の内側にお下がり下さい。」

## 5章（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

なお、作中の201系さよなら運転は、実際の物とはダイヤなどが違ってきます。

## 6章

中央線豊田駅には、隣接する形で車庫と多数の留置線を兼ね備えた豊田車両センターが設けられている。中央線に所属する電車の多くがここに所属しており、そのため豊田駅を始発とする電車も数多い。

その車庫から、1編成のオレンジ色も鮮やかな電車が出庫し、ホームに入線してきた。

「あ、来ました来ました！」

「あれが今日乗る201系ですね。ちょっとワクワクします。」

先頭車両正面に特製のヘッドマークを掲げた電車がホームに入ると、待ち構えていたファンが写真を撮りはじめる。

「ひ、人が多くて怖いです。」

「大丈夫ですよ雪歩さん。僕がちゃんとついていきますから。もし雪歩さんに手を出そうとする不届き者がいても、僕が雪歩さんを守ります。」

「ありがとう涼君。」

と、ホーム上で周り中人だらけにも関わらず、ラブ臭全開な2人ももちろん、周りの人たちの内心は。

（なんだあの見ているだけで血糖値が上がりそうなカップルは！？）

（リア充もげろ！！）

（あの2人、どこかで見たことあるような・・・）

などと思われていた。要するに「バカップルめ！」と言うことである。

ちなみに、2人とも一応帽子や伊達めがね等で軽く変装している。まさかテレビに出ている顔そのまままで出かけるなど、出来る筈がない。

もつとも、涼と雪歩のバカップルの半径5m程は別として、多くの鉄道ファンに出迎えられて、10両編成の201系電車はホームに止まる。

今回のさよなら運転で松本まで運転された後、長野の車両センターに回送、そこで廃車が予定されている。すなわち、このオレンジ色の電車が中央線を走る姿は、今日で文字通り見納めなのである。

鉄道ファンならずとも、愛着を持った人々にとっては感慨深い光景と言える。

扉が開き、さよなら運転に乗車を許された乗客の乗車が始まる。もちろん、2人も乗り込んだ。

昭和時代に製造された車両であるから、座席も壁も床もどこか古臭さを感じさせるものだ。しかし、平成時代に生まれた2人にしてみれば、それが見たこともない昭和と言う時代へのノスタルジーを感じさせる。

「最近の電車も良いけど、古い電車も味があつていいよね？」

「そうですね。」

雪歩の言葉に、涼が相槌を打つ。2人ともウキウキである。

そうこうしている内に、発車の時間となった。

ピー！！

車掌が笛を鳴らし、そして扉が閉まった。

「いよいよだ。」

「うん。」

そしてガタン！と車体が揺れると、電車は動き出した。

「さようなら！！」

「ありがとう！」

多くの人々に見送られ、2人を乗せた201系電車は最後の旅へと走り始める。

一方、ホーム上では写真を撮っていたPが、カメラを降ろして、手を振ってホームから出ていく201系を見送った。

「よし、撮影終わり！早く社長とあずさんと合流しないと！」

Pは手早くカメラを持っていたバッグに仕舞うと走り始めた。

「おい！P君、こっちだこっちだ！」

未だ多くの人がホーム上にいたが、社長の方が声を上げたので、直に2人は見つかった。

「どうだったかね？良い写真は撮れたかな？」

「はい！バッチリです。」

「よし、では我々も行くぞ！」

「あの、行くつてどこに行くんですか？」

あずさが首を傾げる。

「もちろん、今出て行った201系を追いかけるんですよ。」

「追いかけるつて、一体どうやって？」

「まず、ここから八王子まで戻ります。そしてそこで、後続の特急に乗り換えるんです。今行った201系電車は、途中の大月駅で運転停車して、特急に追い越されますから。我々は甲府駅に先回りするんです。」

「運転停車？」

初めて聞く単語に、あずさがまたも首を傾げる。

「それについては後で、もう列車が来ますから。」

Pがそう言った直後、ホームに列車の入線を告げるアナウンスが入った。

「運転停車と言うのは、運転手や車掌の交代、時間調整のために列車が駅に止まることです。扉は閉めっぱなしなので、乗客は乗り降りできませんし、時刻表でも通過扱いになります。」

「秋月君と雪歩君が乗った201系は、その運転停車を大月駅で行い、この「あずさ」号の通過を待つんだ。」

八王子駅から乗り込んだ特急列車「あずさ」号の中で、Pと高木社長は先ほどあずさがした質問について答えていた。ちなみに、3人なので2人向きのシートを回転させて、向かい合わせにしている。

なお中央線を走る特急には、長野の松本まで走る「あずさ」と山梨の甲府・竜王まで走る「かいじ」の2種類がある。

「そう言うことでしたか。それにしても、さっきのPさんすごかったですね。」

「アハハ、いや、いい写真を撮りたかったのです。つい。お恥ずかしい姿を見せてしまいました。」

「あらあら、私はPさんの意外な一面を見て面白かったですよ。」

恥ずかしさに、赤面するしかないP。

「まあ、何はともあれ、旅は道連れと言っし、楽しく行こうじゃないか。」

「そうですね、社長の言うとおりです。甲府までまだしばらく時間もありますし、車販（車内販売）で何か買いますか？」

特急列車には、車内販売という便利なサービスがある。やや割高だが、飲み物・弁当・ツマミから土産物まで一通り揃っている。

「そうだね。ビールでも貰おうかな？あ、それとも山梨名物のワインにしようかな？」

「まだ昼間ですよ。ま、1本くらいなら良いですけど。あずさんはどうします？」

「テキーラで。」

笑顔であずさが言った。

「「・・・」」

Pと社長が固まる。

「テキーラですか？」

Pがおそろおそろ聞く。「冗談じゃないかと思ったからだ。しかし、

あずさは先ほどと同じく、笑ったまま真面目に言う。

「ええ。出来ればボトルで。」

その言葉に、Pは彼女が本気であることを悟る。

（うわあ、あずさんの噂本当だったんだ・・・）

このまま行くと、何やら危ないことになりそうだと思い、Pは酒から離れることにした。

「ええと、さすがにテキーラはないと思いますよ・・・やっぱり酒はやめにしますか？」

「そ、そうだな。途中でないとは言え、やはり昼間からはマズイな。ジュースか何かにしておこう。」

「あらあら。そうですか、それは残念ですけど、そうですね。お昼からは飲むのはやっぱり気が引けますね。」

「だったら代わりに何か甘い物でも・・・せっかいですから、笹子餅でも頼みますか？車販で売っているはずですから。」

笹子餅とは、かつて笹子駅で売られていた御菓子である。同駅が無人駅となった現在は、有人駅のキオスクか、特急列車内の車内販売で買わなければならない。

「それがいいな。あ、あと適当に何かお菓子とお茶でも頼んでくれたまえ。」

「了解、あずさんもそれでいいですね？」

「はい。お2人にお任せします。」

と、ちよつとばかり不穏な空気を感じつつも、3人は楽しく甲府を目指すのであった。

一方、先に出発した涼と雪歩は201系電車から見える車窓を楽しんでいた。

「高尾駅から一気に山の中に入ったね。」

「この先甲府の手前まで、ずっと山の中を走りますから。」

「その分トンネルも多いから、楽しいんだけどね。あ、トンネルに入るよ。」

201系電車はトンネルへと入る。途端に窓の外が闇に包まれる。また、トンネル内に反響するモーター音などによって、外から聞こえる音も大きくなる。特に2人はちょうどモーター車に乗っていたので、一段と大きく聞こえる。

「今の電車よりもうるさいですけど、これはこれが味があつていいですね。」

「そうだね。昔の電車もいいよね・・・昔と言えば、このトンネルは上下線が別々に掘られていたよね？」

「そう言えば、そうでしたね。」

「今なら複線でトンネルを掘れるけど、トンネルを掘った頃はまだその技術がなくて、単線のトンネルを少し距離を開けて掘るしかなかったから、こうなっただって。」

「へえ、そうなんですか。さすが雪歩さん。」

「ありがとう。けど、昔の人ってすごいよね。こんな山の中に線路を通したんだから。」

「まだブルドーザーとかショベルカーもない時代だから、スコップとかシャベルで掘ったんでしょうね。」

「見たかったな、がんばってシャベルでトンネルを掘る人たちががんばっている所。」

「今じゃさすがにそんなことないでしょうね。けど、放送局のアイカブとかに映像で残っているかもしれないから、帰ってから探すと良いかも知れませんか。」

「そうだね。また探してみるね。」

列車はモーター音を高らかに響かせながら、山の中の線路を上っていく。途中相模湖、藤野、上野原、梁川、鳥沢、猿橋と言った駅を通過し、そして運転停車のために大月駅へと停車した。

大月駅は山梨県にある駅で、河口湖方面へ向かう富士急行線との接続駅となっている。また待避線があり、普通列車や貨物列車が特急列車を先に通すための退避にも使われる。さらに言えば、E電の

終着駅でもある。

「ここで、Pさんたちが乗る「あずさ」号に追い抜かれますね。」

「確かそうだったね・・・遅いけど、お弁当を食べようか？」

「あ、話し込んでいてすっかり忘れてました。そうですね、いただきます。」

今回のさよなら運転には、特製駅弁の得点がついている。豊田駅を発車してから、ずっと話し込んでいたので、2人とも開けるのを忘れていた。

「いただきます!!」

「あ、美味しい!」

「本当ですね。僕、駅弁は普段あまり食べないんですけど、やっぱり旅の途中で食べる駅弁はいいですね。」

「そうだね。」

「特に、今回は雪歩さんも一緒だし。」

「りよ、涼君!」

「雪歩さんは、楽しくありませんか？」

「も、もちろん涼君と一緒に旅できて、とっても楽しいよ。」

「ありがとうございます。切符を譲ってくれたPさんと社長さんには本当に感謝しないといけませんね。」

「そうだね。2人の分までしっかり楽しんでおこうね。」

「はい！・・・あ、雪歩さん。」

「なに？・・・！？」

涼はいきなり手を雪歩の顔につけた。

「あ、ごめんなさい。ご飯粒がついてましたよ。」

「あ・・・あ、ありがとう。」

「どういたしまして。」

と2人が駅弁を楽しんでいる間に、横をPたちが乗った「あずさ」号が走り抜けて言った。

なお、今回の旅はあくまでツアーである。そのため、涼と雪歩の周りには当然他のお客さんも沢山いたわけで、その内の7割が2人が繰り広げるバカップルぶりに、以下の様な気持ちを抱いていた。

（（イチャイチャするんじゃないねえ！！）（））

## 6章（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 7章（前書き）

次で完結の予定です。

## 7章

大月駅で特急列車の通過待ちをした後、涼と雪歩を乗せた201系電車は再び走り始めた。ここから甲府盆地に入る勝沼ぶどう郷までは、列車は急勾配の山の中の線区を走る。

周辺の景色は相変わらず山々、さらに山である。しかしながら、雪歩のテンションは鰻上りに高くなる。何故なら。

「涼君、涼君！この初狩の駅は今もスイッチバックの跡が残っている駅なんだよ！！」

「本当だ。スゴイですね」

「今はスイッチバックは廃止されちゃったけど、保線用の線路として残されてるんだって」

雪歩の領域は地下鉄とトンネル、そして鉄道施設である。中央線の高尾以西の区間は、トンネルとスイッチバックの跡のオンパレードで、特に初狩駅は現在もその大規模なスイッチバックの跡が残っており、雪歩のテンションはマックスとなった。

ちなみにスイッチバックとは、列車の登坂能力を超えた急勾配を列車が上れるように考えられた方法で、急な坂の途中に平坦な場所を幾つか作って、列車を一旦そこに入れ、進行方向を逆にしてバックする。そして次のスイッチバックまで行くと、再び進行方向を逆転する。簡単に言えば、線路を山肌に沿って階段状に敷いて、列車を1回以上進行方向を逆転させて進ませ、それによって勾配を緩やかにするもの。

急坂を列車が上る方法として、或いは急坂の途中に駅を作る方法として盛んに造られた。しかしながら、昭和も半ばにはいると列車が蒸気機関車からパワーのあるディーゼルや電車になったことで、こつしたスイッチバック設備は無用の物となり、次々と廃止されていった。

しかし、その痕跡自体はそこかしこに残っており、雪歩を熱くさせた。

「昔の人たちは、ああやって知恵を絞ってがんばったんだよね」

「そうですね。僕たちも見習わなくちゃいけませんね・・・けど、本当に雪歩さんはスイッチバックが好きですね」

「うん。スイッチバックって、山に沿って走っていくでしょ？バツクして、少しづつ。そう言うところが好きなんだ」

「確かに、一気に進んでいくのもいいですけど、少しずつ着実に進んでいくのも格好いいですね」

「そうそう。けど、残念なのは最近じゃほとんど残ってないことなんだよね」

「確かに、見に行こうと思ったら長野の姨捨駅位ですよ・・・だつたら今度、連休でも取っていきますか？」

「いいね。行こう行こう！姨捨駅は夜景が綺麗だから、一緒に見ようね」

「はい！」

と、2人は鉄道趣味を楽しみつつも、相変わらずのバカップルぶりを発揮していた。

2人のバカップルがいちゃついている頃、Pたちは特急で先回りして甲府駅へと到着し、そこで写真撮影の準備に入っていた。

「ようし、準備完了と。社長、そっちはどうですか？」

「うむ。こっちも準備完了だ」

2人はホームの端でカメラを抱えていた。もちろん、お目当てはこれからやってくる201系だ。

「やっぱり三脚ないと不便ですね。」

「ふむ。だが仕方が無い。三脚は原則禁止だからな。」

最近の鉄道ファンのマナーが目立つせいか、三脚を使つての写真撮影を禁止する動きがある。そのせいで、2人もカメラを手で抱えるしかなかった。

「三脚がないと、安定しないんですよ。」

「ま、文句を言っても始まらない。今はこれでやれるだけやろつ。」

「Pさん、社長さん」

「あ、あずささん」

「飲み物を買ってきましたよ。そのキヨスクで。」

「あ、すいません」

頭を下げながら、Pはあずさから缶ジュースをもらった。

「社長さんもうござ。」

「ああ、ありがとう」

と、社長は自然にあずさから、コーヒーの缶を受け取った。が、すぐにあることに気づいた。

「？」

（ちょっと待った！あの万年方向音痴のあずさ君が、一人で飲み物を買って迷わずに帰って来ただど！？一体どう言うことだ？）

「どうかされましたか、社長さん？」

「いや、何でもない。」

「ならいいんですけど。ところで、雪歩ちゃんたちが乗った電車はまだでしょうか？」

「もうすぐ来ますよ。ダイヤは既に調べてありますし、それに駅のホームの電光掲示板にも団体で文字が出てるでしょ？あれの筈です

から。」

Pの言ったとおり、あずさを見ると、駅の列車案内用の電光掲示板には団体列車の案内が出ていた。

「あら、本当ですね。それで、あの電車が出て行ったら私達はどうするんですか？東京に帰ると言うわけではないんですよね？」

「もちろん、もう1回特急に乗って松本へ行きますよ。松本で涼君たちと合流したら、そのまま東京へ戻りますけど。時間があれば、松本で観光とか出来るんですが、明日は仕事ありますからね・・・ところで、あずささんの方こそ、良いんですか？話すことも話したい、東京へ戻っても良いですよ？ちゃんと東京までの運賃は出しますから？」

Pとしては、気配りのつもりで言ったのだが、あずさは途端に寂しそうな、残念そうな表情をする。

「あの、Pさんは私が近くにいたのが御迷惑でしたか？」

「え！？迷惑？いえいえ、そんなこと全くありませんよ。むしろ、側にいて欲しい位です」

「だったら、今日はとことんPさんに付いていきます」

「本当に良いんですか？」

「ええ」

そんな2人の様子を見て、社長はどうしてあずさが迷わずに帰っ

てこられたかが、よくわかった。

（なるほど。そう言うことが・・・お似合いじゃないか）

「社長、どうかしましたか？考え込んで」

「いや、何でもないよP君。おっと、もうすぐ時間だぞ」

社長が言うまでもなく、ホームにアナウンスが流れる。

「間もなく、1番線に団体列車が参ります。危ないですから、黄色い線までお下がり下さい。この列車には、御乗車出来ません。」

「あ！？そうでした。それじゃあ、あずさん。ちょっと待っててくださいね」

「はい」

まもなく、ホームにオレンジ色も鮮やかな201系が進入してきた。もちろん、Pと社長は夢中でレンズを向けてシャッターを切った。

一方、車内の2人はと言うと。

「甲府駅に着いたね」

「Pさんたちがどこかにいるはずなんですか」

しかし、2人から見える範囲に3人の姿はなかった。そして列車

は発車時間を迎えて、再び走り始めた。

と、後方に流れていく風景を見ていた涼が声を上げた。

「・・・あ、いました。ホームの先に」

「いたね・・・」

と、雪歩の表情が神妙な面持ちとなった。

「どうかしました、雪歩さん？」

「うんうん。なんかPさんとあずさんの辺りに、変なオーラが見えた気が？」

「あ、言われて見れば。何となく桃色に近いような感じだった気が・・・」

などと、2人は言っていたが。

（（お前らなんか桃色を通り越し、てピンク色だわー！！）（（

と周囲の乗客を内心怒らせていたりした。

そんなこととは露知らず。

「雪歩さん、そう言えばさっきの甲府駅は発車チャイムがジュピターなんですよ」

「そうなんだ。いい歌だよな」

と相変わらず、話に華を咲かせていた。

そんな感じで、一行は旅を楽しんでいた。

甲府を出てからも、雪歩は車窓に見える廃線跡やスイッチバックの跡、岡谷駅付近のダイナミックな高架線、塩尻駅の広大な機関区などにはしゃいでいた。涼はそんな彼女を優しく見つめつつ、時折通過する駅で使われる発車チャイムの種類などを言いながら、自分の得意分野を披露していた。

一方、Pたちは後続する特急列車「あずさ」号に乗り込み、再び涼たちを後追いした。途中の富士見駅で運転停車した涼たちの乗る201系電車を追い越し、先ほどと同じく松本へ先回りした。

なお、この際甲府駅までと同じく、3人は向かい合わせにした4人座席に座ったのだが、社長はPにあずさの隣に座るよう勧めた。

「若い者同士で並んだほうがいいだろ。ハハハ・・・」

訝しげに見る2人を前に、社長はただそう言って笑った。

いきなりの社長の行動に驚いた2人であったが、満更でもなかったらしく、その後は松本駅に着くまでずっとそのままであった。

そして、全ての物に終わりがあるように、5人の旅もいよいよと終点に着くこととなった。

「さようなら！」

「ありがとう！」

ファンの声援に見送られて、東京の豊田から松本までロングランした201系電車は、乗客を全て降ろすと車庫へと引き揚げられていった。

もう二度と乗客を運ぶことはない。あとは長野の工場まで自力で回送され、そして重機の餌に・・・もとい、廃車となるのである。

「これで、中央線を走る201系の歴史は完全に幕を閉じたわけだ」

社長が名残惜しそうに言う。

「また一つ、味のある列車が消えていくんですね」

「その通りだP君。だが、201系は永久に不滅だ。我々の心の仲で永遠に走り続けるのだ！」

そんな熱く語る2人を見た他の3人はと言えば。

「2人とも、自分たちの世界に入っちゃってますね」

「私達には近づけないね」

「あらあら。本当に今日は驚くことばかりね。二人はしばらくそっとしておきましょう。それで、2人は楽しく旅を出来たのかしら？」

「「はい!!」」

「そう、よかったわね。2人はお似合いのカップルだしね」

「あ、あずささん」

「こんなところで止めてくださいよ。」

2人が顔を赤くする。しかし、否定はしない。

「うふふ。いいわねえ、雪歩ちゃんの運命の人は涼君だったのね?」

「あうあう」

雪歩が恥ずかしさのあまり、変な声を出す。

「あ、あずささん・・・」

と、ここで涼も反撃にでる。

「あずささんこそ、Pさんと楽しんできたんじゃないですか?」

「い、いきなり何を言うのかしら?」

あずさが明らかに、不自然に視線を逸らす。

「あずささん、甲府駅でPさんと一緒にいた時、随分と楽しそうじゃなかったですか?」

「ええ!?まさか、見られていたなんて」

「あ、やっぱりそうだったんだ。あずさんこそ隅に置けない人だなあ」

「もう、年上をからかうのは止めなさい。」

と、あずさも顔を赤らめる。

「おい、3人とも何やってるんだ？」

ようやく自分たちの世界から戻ってきたPが声を掛ける。

「「「いいえ、何も」」」

「そうか。」

「それでは諸君、東京へ帰ろうか・・・と言いたいが、列車までまだ時間があるから、上の売店で駅弁でも買っていこう。それでいいかな？」

「「「はい！」」」

「よし、ではさっそ「見つけたああ!!」」

社長の声を遮るように、ホーム上に場違いな若い女性の声が響き渡った。



## 7章（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

## 8章

「やっと追いついた！」

「げ！律子姉ちゃん！？」

「な、何で律子がここにいるんだ！？」

「涼君が撒いたのではなかったのかね！？」

「ど、どうして律子さんが？」

「あらあら」

Pたちの目の前に現れたのは、涼が東京で撒いたはずの律子であった。

「フッフ、甘く見ないで欲しいです。こんなこともあるつかと、涼とPの服には発信機を」「な！？」

某宇宙戦艦技師長のような不敵なセリフを言う律子。言われた2人は彼女が話し終える前に、慌てて自分たちの服をまさぐる2人。

「何て言うのは冗談で」

律子が目を半目にして言う。見事に2人とも騙された。

ズル！

「また典型的なオチだね」

高木がズッコケた2人を見て、冷静に一言。

「私は涼の従姉弟よ。涼の両親に電話して行き先を調べることに位造作の無いことだったわ。後はそのまま高速バスで一直線よ」

「ぎゃおおん！！父さんも母さんも、何で律子姉ちゃんに言っちゃうんだよ！？」

「これじゃあ頭が上がらないわけだ」

涼と律子のわずかな遣り取りで、2人の関係を読み取らざるを得ないPであった。

「けど涼が鉄道が子供の頃から好きだって言うのは知っていたけど、まさか社長やPに雪歩まで鉄オタだったなんて、さすがに予想外だったわ」

「うう、やっぱり私変なんですね！？こんなダメダメな私、穴掘って埋まっていますう」

「雪歩さん、落ち着いて下さい」

涼が止める。

「そうよ雪歩。確かに驚きはしたけど、変だなんて思っていないから。最近じゃ鉄子って言う言葉もある位だし。私たちはそんなことであなただけを変な子扱いしたりしないわよ。全く、隠す必要なんかなかったのに」

「そうよ雪歩ちゃん。自分を見下すことなんてないわよ」

律子とあずさの言葉に、雪歩はホッとしたようだ。

「あ、ありがとうございます」

「にしても、まさか松本とはね。他の皆は結局お金がなくて来られなかったわ」

「だったら、どうして律子はこちらまで来られたんだ？」

すると、律子は得意げに言い放った。

「余裕を持って準備しておくのは、基本中の基本ですよ。プロデューサー」

「こいつは一本取られたな」

「伊達にプロデューサーを目指していませんから。それで、皆もう東京へ帰るんですか？」

「そのつもりだが？明日は仕事があるからね」

高木の言葉に、律子は少ばかり不満げだ。

「ええ！？折角松本まで来てとんぼ返りですか？」

「だがねえ、もう時間がないし」

「それに、観光で来たわけじゃないし」

社長とPの言葉に、律子は呆れた。

「そりゃあ、鉄ちゃんの社長やPはそれで良いかもしれませんが、ちよつとはあずささんや私のことも考えてくださいよ!？」

「けど律子姉ちゃん、仕事は本当だし。僕だって学校があるし」

「仕事って言っても、サラリーマンみたいに朝一じゃないし。学校だって、半日休んだくらいでどうこうなるもんじゃないでしょ？涼も雪歩も成績は悪くないし。それに」

律子は鞆から何かを取り出した。

「そ、それは!？旅のお供のJ〇B時刻表!しかも携帯版!」

「私が時刻表を持っているのが、そんなに可笑しいですかプロデューサー?」

「あ、ごめん」

「で、話を戻しますけど。朝一番のあずさ号に乗れば10時前には東京に着けますね。ちよつと早起しなきゃいけませんけど、折角松本まで来たんですから、浅間温泉あたりで温泉に入りましょうよ」

「温泉か、確かに魅力的ではあるな。うちの事務所はアイドルたちが出勤してくる午後まで暇だから、午前中に戻れば良いだろうが・・・しかし、秋月君や萩原君は学校があるだろ?」

「大丈夫でしょ。半日位ズル休みしたところで、大した問題じゃありませんって」

「り、律子姉ちゃん」

さすがに涼が律子の言葉を聞いて止めに入ろうとする。しかし、律子は涼に対して先手を打った。クイクイと手で自分のそばに来るように指示する。

（嫌な予感）

「涼、あんた私に口答えするわけ？」

「そ、そう言うつもりじゃないけど。ズル休みするのはいけないってことを言いたいわけで」

「全く、この真面目人間め。1回位したくらいじゃ何の問題もないわよ。それに、あんただって雪歩とお泊りしたいでしょ？」

「な!？」

雪歩のことを出され、涼の心臓の心拍数と血圧の値が跳ね上がる。もちろん、顔も真っ赤になる。

「凶星ね」

「何言ってるの姉ちゃん!」

「涼、正直に言いなさい。雪歩との仲を深めたいでしょ?」

「そりゃ、まあ・・・」

「だったら少しは自分に素直になりなさい。こんなチャンス滅多にないんだから。それとも、私の好意を無下にする気？」

「・・・わかったよ」

（フ、涼はこれで陥落と。後はPを何とかすれば）

（鬼）

「涼、今何か言った？」

「いいえ、何も！！」

（まさに姉天下だね）

（涼はあれを10年以上受けているのか？可哀想すぎる）

2人のやりとりを見ていた高木と社長は、さすがに人生経験その他諸々に詳しいだけあって、涼が律子にどんな目にあわされているか見抜いていた。一方雪歩とあずさはそこまでは見抜けなかったのだ、2人の遣り取りを不思議そうに見ていた。

「「？」」

「涼の方はOKだそうですよ」

「まあ、私としても明日の昼までに戻れば大丈夫だが・・・萩原君とあずさ君は大丈夫かね？」

「私は特に問題ありません」

あずさの方は問題なさそうであった。しかし、雪歩は若干浮かない顔をしている。

「ええと、私は」

すると、ススと律子が彼女に近づいて行った。そして1分程何か遣り取りをしていた。それが終わると、雪歩は気持ち少しばかり顔を赤らめながら、高木に向かって言った。

「ええと、それじゃあ私もお願いしますう」

その光景を見ていたPは、律子に一言。

「この律孔明め！」

「はて、何のことでしょうかプロデューサー？」

律子とはばけた顔をして、話をはぐらかした。

「こいつ・・・」

「おおい、2人とも。何をしているのかね？いくぞ」

「Pさんも律子ちゃんも、行きますよ」

「あ、わかりました社長にあずささん！律子、お前とは後で色々と話し合う必要があるようだな」

「それはこっちのセリフですよプロデューサー。今まで私達にこそこそと隠してきた事を、徹底的に追及させてもらいますから」

そして一行は浅間温泉へ。

「て、何で僕と雪歩さんが同じ部屋なの!？」

「・・・」

「お約束だよ」

高木が、「何バカなことを言っている」と言わんばかりの表情で言う。

「何のお約束ですか!？」

「涼君、それ以上言ったら負けだと思っよ。俺もあずさんと同じ部屋に、何時の間にかなっているし」

「まあまあ涼君。べ、別に私は涼君と一緒にでも、全然構わないから」  
「ポカーン」

涼は完全に呆けていた。

一方Pとあずさも。

「Pさんは、私と一緒に嫌ですか？」

「いいえ、全然OKです！」

その様子を、高木は嬉しそうに見守っていた。

「いいねえ、若いのは」

「Pはともかく、涼に先を越されるのは癪ですけど、まあ雪歩ならお似合いでしょうから。ところで社長、実はPも交えて相談したいことがあるのですが？」

「何かな律子君？」

「今回の一件でちょっと思いついたことがあります」

「ほう。後で詳しく聞かせてもらおうか」

「はい！」

律子は手をギュツと握って、満面の笑みで答えた。

翌日早朝。Pたち一行は早朝の浅間温泉を出発して、朝一番の特急列車で東京へと戻って行った。なおその際涼とPがやたら眠たそうにしていたり、雪歩とあずさがつやつやしていたりしたのは、公然の秘密である。

そして東京へ戻った後、律子はある計画を発動する。それは。

3年後

「秋月涼と！」

「萩原雪歩が行く！」

「ドキドキ秘境駅ツアー！！！」

「今日僕たちは、岩手県の押角駅にきています！」

「ここは屋根もなくて、周りに人家もない秘境駅なんです。本当にどうしてこんな所に駅があるのか、不思議だよね？」

「けどこの駅は昔、粘土の輸送に貢献した駅で、雪歩さんが大好きなスイッチバックもあつたんですよ！」

「それは興味深いね！！！」

テレビの中の2人はとても生き生きとしていた。

「いやあ、律子の策は大当たりだったな。まさか涼と雪歩を組ませて、旅番組や鉄道系番組に売り込むとは」

765プロの休憩室で、テレビ画面に映る2人の姿を見ながらPが呟いた。

「それもつ何度目のセリフですか、先輩？」

「だってさあ、これがお前にとって初めてのプロデューサー業になったわけだし」

「まあ、確かに仕事に弾みをつけたって意味じゃ、感慨深いですけどね」

「あれから3年か、涼君も18歳になったし。俺もまさかあずささんを嫁にして、父親になるとは思わなかった」

「あの日旅館ではめ外したのが原因「それ以上言っな！」

「結婚してから3年も経つのに、未だラブ臭全開の人が何を言うんだか」

「やかましい」

「ラブ臭全開と言えば、涼と雪歩も問題ありですね。ブラックコーヒーが砂糖入りになったとか、紅茶がミルクティーになったと言う苦情が毎日寄せられます。その点がなければ、2人ともいいアイドルなのに」

「誰にだって欠点はあるさ。竜宮小町の美希や伊織だって、完全無欠ってわけじゃないだろ？」

「ええ、まあ。あの2人もこれ以上騒ぎを起こしてくれなければ助かるんですけどね」

律子が冗談半分でそう言ったが、Pは冗談とは思えない表情で返した。

「いや、それは無理っぽいぞ」

「へ？」

「TV見てみる」

律子は画面に視線を戻した。

「実は皆さん、今日は僕と雪歩さんから重要なお報せがあります」

「恥ずかしいですけど、涼君と一緒に決めたことですから」

2人のセリフを聞いて、律子の表情が強張る。

「まさかあの2人！？」

「あれ言う気満々だな」

もうPは半ば諦め顔であった。

「僕たち」

「私たち」

「「結婚します！！」」

「あーあ、言っちゃった」

律子が肩を落とす。これから起きるであろう、マスコミ対策など

の仕事を予測し、呆然としているのだ。だが、Pはさらに達観した表情で言った。

「待て律子、まだ何かあるみたいだぞ」

「え!？」

律子は二度視線を画面の2人に向ける。

「実を言うと、今雪歩さんのお腹には「まさかあの子たち!？」」

「「赤ちゃんがいます!!」」

「何でそこまで言うのよ!？」

「言っちゃったもんは仕方が無い。律子すぐにマスコミ対策を。俺とあずさんの時を思い出してしっかり働け!」

「トホホ・・・」

「まあ、一段落するまでの辛抱だ・・・それが終わったら、休暇をもらってどこかへ行こうかな?東北縦貫線で熱海にでも行こうかな?それとも涼と雪歩が紹介した、復旧した岩泉線も良いかも」

何だかんだ言って、765プロとそこにいる鉄ちゃんたちは平和であつた。

## 8章（後書き）

ここまでお付き合いいただきありがとうございました。

御意見・御感想お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4731r/>

---

出発進行！！ P発アイドル行

2011年9月25日03時22分発行